The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本における泰山府君の受容と展開
Author(s)	馬, 冰
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　馬　氷　）	
論文題名	日本における泰山府君の受容と展開

論文内容の要旨

中国山東省泰安市にある高さ１,545mの泰山は、華北平原を俯瞰する独特な場所に位置している聖山である。古来、道教聖山の五岳の中で「独尊」と言われ、秦の始皇帝による「封禅」が挙行されて以来、泰山への崇拝は厚くなる一方であった。また、泰山信仰は文学、宗教、建築、民俗等多方面の文化を包摂しており、中国歴史を貫く独自の文化を形成している。泰山は当初、死者の赴く場所だと信じられていた。やがて、仏教が中国に伝来され、漢訳仏典に「太山地獄」がみられるようになり、泰山と地獄が結びつけられた。後漢時代以降は、泰山神の人格化が行われるようになる。泰山府君が冥府の長官として現れ、人間の生死福禄を司るようになるのである。唐代になると、皇帝は泰山神を加封し続けた。この頃から、泰山神は「東岳大帝」と呼ばれるようになったようである。宋代になると、泰山神として、別名「泰山娘娘」ともいう、「碧霞元君」という女神への信仰が起こる。そしてその信仰は明代以降、先にあった「東岳大帝」よりも人気を博するようになったのである。

中国における泰山信仰は、日本へと東伝した当初、泰山府君だけに対する信仰であったが、やがて他の宗教に取り入れられて、様々な神や仏たちと習合した。例えば、陰陽道においては、泰山府君が主神とされ、陰陽師たちによって泰山府君祭がしばしば行われていた。密教においては、泰山府君が閻魔天の眷属とされ、密教曼荼羅と図像集に取り入れられた。十王信仰においては、第七泰山王が泰山府君信仰に由来するものと考えられ、死者を審判する存在として信仰されるようになった。現在、泰山府君は赤山禅院の本尊として祀られており、赤山明神と同一神とされているし、過去には深沙大将やスサノオ、地蔵菩薩等と同一視されることもあった。

以上のことから、日本文化の中には、泰山府君が点在し、時代によっては大きな役割を担っていたこと、また現在もその信仰は形を変えながらも存在し続けていることが分かる。本論文は、日本における泰山府君を対象とし、泰山府君の日本における受容と展開について検討したものである。

本論文は、以下のような構成になっている。

第一章は、中国における泰山信仰と泰山神を概観し、先行研究に残されている問題点を示し、本研究の目的を明確した章である。日本における泰山府君については、陰陽道研究の中で論じられることがほとんどであり、仏教や神道研究では、ほとんど言及されることはない。また、泰山府君を道教的な要素とみなし、日本における中国道教の受容を研究するものもある。しかし、泰山府君は中国ですでに仏教色を帯びており、それが移入された日本における泰山信仰には仏教要素が少なくないのである。さらに、中古から中世において、泰山府君は非常に重要な神だったが、現在、その信仰は希薄化、もしくは不可視化している。もちろん先に述べたように、現在も赤山禅院で泰山府君信仰は継承されている。ただ、その姿は、陰陽師ブームの中で作られた陰陽道を用いた作品中と、近年復曲された能「泰山府君」にしか、直接見ることはできないのである。これらの問題点を踏まえ、本論文では仏教にも目を向けて泰山府君の形象を分析し、諸多の神仏との習合する形態を考察することによって、泰山府君の表象と、希薄化現象とその原因を検討するが、こうした視点と研究背景を本章で述べ、章の最後で、日本語の「泰山府君」の名称や読方と表記を簡単に述べる。

続く第二章では、仏教絵画における泰山府君の形象を三種紹介する。具体的には、菩薩姿、持幢の文官姿、中国王侯姿の泰山府君である。菩薩姿の泰山府君は黒闇天女とともに閻魔天の眷属として両界曼荼羅に南方閻魔天の傍に描かれる。持幢の文官姿の泰山府君は閻魔天曼荼羅によく現れる。ただ特別な例としては大阪長泉寺蔵閻魔王図に同様の姿が見られる。日本で十王信仰が普及していくにつれて、中国王侯姿の泰山府君が、十王図や地獄絵、六道絵、十王経典等に出現するようになる。絵画の種類や数量から見ると、第三種の中国王侯姿は泰山府君の主たる像容となったと言える。

中世から近世にかけて、絵画の様式と十王との一体化や、泰山府君の形象が曖昧になったこと等が原因で、仏教における泰山府君は希薄化の傾向を見せる。閻魔王や閻魔信仰だけが興隆し、強調されたことや、十王信仰から十三仏

信仰への変容が、泰山府君の姿が希薄化、減少していった理由だと考えられる。

第三章では、異形の泰山府君像を二例考察し、泰山府君像の希薄化についてさらなる検討を行った。一つは、人頭幢としての泰山府君像であるが、この人頭幢は、単なる持物から、「泰山府君幢」と「黒闇天女幢」という二体幢をへて、最後には二体幢が合体した「見る目嗅ぐ鼻」と呼ばれる一体二頭の形式へと変化する。こうした人頭幢の変容過程を明確化した後、密教菩薩姿の泰山府君が泰山王に変容したのではなく、人頭幢の泰山府君が閻魔王庁にある「泰山府君幢」に変容した、ということを筆者は主張したい。その後も人頭幢はさらに変容していき、名称も変化したことによって、泰山府君が人頭幢から消失したのである。そして、泰山王は十王信仰とともに日本に再伝来されたものであり、中国宋元画による影響が大きかったことも本章で述べる。

これとは別に、複写関係のある二尊院本と浄福寺本十王図について述べる。これらの図において泰山王は、剣をかざした武将姿で描かれており、そばに鳥居と女性が描かれている。こうした図様の分析から、これらの十王図は、妙見菩薩に擬して描かれた可能性が大きいことを示す。その理由としては、本章で示す史料に、両者が同一神であると記されていることや、延命という福神の性格が相似していることあげられる。さらに、これらの十王図では、十幅の十王図中でも泰山王図が閻魔王図よりも特殊化されて描かれていることは、注目に値する現象であり、泰山王の図様が特殊化された意味について考察を加える。

第四章では、泰山府君が様々な神・仏と習合する形態を、主に信仰と形象の方面から考察し、それに繋がる泰山府君の希薄化について論じる。まず、前章で論及した妙見信仰であるが、妙見信仰が日本に伝播してきた過程でも、また妙見信仰に関する経典においても、両者の習合は見られない。しかしながら、北斗曼荼羅に泰山府君像が見られる場合があり、史料では両者が同一視されている。信仰上、「主死」「延命」の利益が共通しており、先行研究においても北斗法・泰山府君祭・閻魔天供三者は実質上区別されていないことが指摘していることから、泰山府君と妙見信仰との習合が、日本の様々な宗教思想の背後に隠れていることを指摘する。だが、妙見信仰が他に様々な現生利益と結びついたが、結局、泰山府君との習合は表面化されず、むしろ疎遠な関係になったことを示す。他方、深沙大将と泰山府君が同一神だということが、複数の史料に記されている。それにもかかわらず、両者は形象上信仰上共通点が存在しないため、その習合は実は極めて薄かったのではないかということを指摘する。また、先行研究には、赤山明神と泰山府君との習合は鎌倉時代以降に起こったものであるという指摘がある。なるほど、形象上には、赤山明神像に中国王侯の面影が見える作例があるし、現在泰山府君を祀っている赤山禅院は福禄神として名高く、泰山府君信仰が現世利益に変化したことが分かる。最後に、中世神話にスサノオに冥府神の性格を付与し、泰山府君との同体化が見られる。だが、泰山府君よりも閻魔王がより適切な存在だとされた結果、冥府神としての性格は閻魔王に奪われてしまったと考えられる。他にも、地蔵菩薩や薬師如来も泰山府君と密接な関係を持っていたことがわかっており、これらの神・仏の間とも相互関係がある。

泰山府君を中心とする複雑な習合関係の過程にはいくつかの「逆転現象」が見られ、それが泰山府君の希薄化にも繋がったと考えられる。まず、道教神の泰山府君は、仏教の要素も強いものの、結局神道の神としてのみ、信仰が続いている。一方、深沙大将や薬師如来、地蔵菩薩は仏教経典には、泰山府君との関係が明確に記録されているものの、実際の信仰上の習合は極めて希薄であった。反対に、妙見信仰は経典に記していないものの、利益上に両者には共通する点が多いので、信仰上も強い習合関係が存在したと考えられる。

第五章および終章では、最初に問いかけた泰山府君の表象問題と希薄化問題に対し、第四章までで行った考察に加え、諸先学の陰陽道研究を補足し、仏教・陰陽道・神道の三視点から再検討し、最後に泰山府君の尊格を検討する。仏教においては、中国王侯姿の冥府神として泰山府君は一方では人頭幢に変容したことで消失したと考えられ、もう一方では閻魔王と本地の地蔵菩薩への信仰が高まることと十三仏信仰及び十三仏図の変容したことが主な理由であろう。また、薬師如来、深沙大将といった仏や菩薩との結びつきが本来薄かったり、定着しなかったりすることも一因であろう。陰陽道では、主祭神としての泰山府君は創出された当初から統治者や陰陽師たちに重要視されており、その関係があまり変わらなかったからこそ、陰陽道が廃止させられた際に突然消失したと考えられる。神道では、泰山府君はスサノオとの習合はわずかな史料にしか見られないし、先に述べたように閻魔王が冥府神の座に座ることになったが、赤山明神との習合は現在でも続いている。

こうして考えて見ると、日本における泰山府君信仰では福神的要素のみが継続的に存在し、冥府神的な役割が与えられ、一時的に強調された時期もあったが、結局は現生利益的な福神的要素のみが残ったと言えるだろう。ただ、図像的には一時的な冥府神としての信仰があった時の方が、明確に描かれていたことが分かる。

それに加え、仏教・陰陽道・神道という日本三大宗教における泰山府君の表象は、おのおの強弱が異なっていることも分かった。仏教では、形象上は「強」であったが、信仰上は「弱」であったのに対し、陰陽道では、形象上は「弱」であるが、信仰上は「強」である。そして、神道における泰山府君は、信仰上、形象上いずれも「弱」でありながら

も、泰山府君信仰を継承する点では「強」だったと言える。

以上が、本論文で述べた事項である。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　馬　氷　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　准教授	岩井　茂樹
	副 査　教授	加藤　均
	副 査　准教授	柴田　芳成
	副 査　教授	五之治昌比呂
	副 査　准教授	水野　亜紀子

論文審査の結果の要旨

提出された「日本における泰山府君の受容と展開」は、全五章からなるもので、以下のような内容の論文である。

第一章では、中国における泰山信仰のあり方や、泰山府君信仰の様相、さらには先行研究、問題の所在などが述べられる。ここでは、中国で盛んであり、また日本でもかつては盛んであった泰山府君信仰がなぜ現在は希薄化してしまったのかという問いが発せられる。この問題への回答を導くため、論者は文献資料だけではなく、先行研究では行われていなかった図像資料も含め分析と考察を加えると述べる。

第二章では、図像資料の中に見られる泰山府君の姿について論じる。ここでは両界曼荼羅、十王図、六道絵などに描かれた種々の泰山府君像が示される。興味深いのは、泰山府君がいずれの図でも共通して中国の王侯姿をしていることである。泰山府君は一般的に中国の王侯姿で描かれることが、ここで示される。

第三章は、第二章で見た中国の王侯姿とは大きく異なる泰山府君の図像の意味について論じた箇所である。たとえば、「人頭幢」と呼ばれる棒状のようなものの頂上部に泰山府君が見られたり、あるいは十王図の中でも二尊院本や、これと強い影響関係にある浄福寺本だけには武将姿の泰山府君の姿が描かれたりする。論者は、これを「日本的変容」と呼び、その様相や意味を詳しく論じる。特に興味深いのは、武将姿の泰山府君であり、これは図像の類似性から判断して、妙見菩薩と習合した結果だと、論者は述べる。中国と日本の両国で、泰山府君が星の信仰と深い関わりがあったことから判断してもこの結論は十分納得のいくものである。

第四章は、泰山府君と影響関係にあるとされた種々の神仏や信仰との関係性について述べた箇所である。具体的には、妙見信仰、深沙大将、赤山明神、スサノオなどとの関係性が詳述される。この章によって、泰山府君の日本における習合範囲が明確化される。

終章では、論者がはじめに立てた疑問、つまり「なぜ日本では泰山府君信仰が希薄化したのか」という問いに対する解答がなされる。論者は、十王信仰では閻魔王に主役の座を奪われたこと、十三仏信仰の中に埋没してしまったこと、「人頭幢」として描かれた結果、呼称も変わり、かつ目立たなくなってしまったこと、福神としての性格だけがかろうじて残ったが、それだけでは信仰として弱かったこと、などを希薄化の理由としている。

以上が論文の概要である。文章表現に曖昧な点や不明瞭な点が散見されることや、資料が等価に扱われている点など、不十分な点がないわけではない。

ただ総合的に見れば、従来の研究のような文献資料の分析だけでは決して明らかにならなかったと思われる点が見られたり、武将姿の泰山府君の謎が明らかにされたり、泰山府君信仰の習合範囲が明確化されたり、といった点に新たなものが見られる。したがって、担当者は全員一致で、本論文が博士号取得条件を十分満たす内容を有するものであると判断した。